

松久玲子 著

『メキシコ近代公教育における
ジェンダー・ポリティクス』

行路社 2012年 302ページ

メキシコのフェミニズム研究においては、公教育における「母性」の称揚、国家に貢献する母親像というジェンダー規範の存在が明らかにされてきた。本書は、それを踏まえ、この規範の形成過程を、ジェンダーポリティクスという視点から検証しようとするものである。そのためフェミニズム運動を軸として、その内外の多様な主張、教育思想、教員の労働運動、近代思想、それらに動員された女性の姿に焦点を当て、1877年に始まるディアス期から1940年までの、該当の興味深い諸テーマ（ユカタン州の合理主義教育運動、同州フェミニズム会議、同州の合理主義教育の実践と母性主義の勝利、1920年代の優生学、母性主義と女子職業教育、社会主義教育とジェンダー）が扱われる。

フェミニズム運動は近代化の中で現れる。近代化の必須の装置としての公教育は、フェミニズム運動の重要な闘技場であり得たのだろうか。あるいは、フェミニズムもまた近代化のための公教育に取り込まれていく運命にあったのか。近代化した世界で見られる「母性主義の勝利」に対して、まだその勝利が自明ではない時期におけるフェミニズム運動や政府等、主体達相互の闘争的言動（ポリティクス）に焦点を当てたはずの本書からは、その回答は後者のように印象づけられる。（米村明夫）

三田千代子 編著

『グローバル化の中で生きるとは
—日系ブラジル人のトランスナショナルな暮らし—』

上智大学出版 2011年 321ページ

日系ブラジル人がデカセギとして来日し始めてから四半世紀が経過した。本書は、日本滞在が長期化した日系ブラジル人就労者とその家族を対象に、研究者や地方自治体の担当者が各自の専門分野から、その実態や問題について調査や考察を行ったものである。また本書は、ホスト社会の日本とホームランドのブラジルの両空間を生きる日系ブラジル人をトランスマイグラントと捉え、このような人の移動形態は近年顕著となったグローバル化の一特徴だと認識から、人の移動により作り出される多様な関係性に関して現在や未来に向けた議論を喚起している。

本書は8つの章と2つのコラムから構成される。はじめに、ブラジル人の移民状況や日本移民について概観した後（第1章）、日本企業の雇用政策や日系人の労働環境（第2章）、日系人が集住する3つの地方自治体の状況や取り組み（第3章）が詳説される。次に、在日ブラジル人の教育問題やブラジル人学校の普及（第4章）、エスニック・ネットワークとしての宗教生活（第5章）が論じられる。そして、在日ペルー人との比較における生活戦略（第6章）、二世代による「生きる場所」の模索や選択（第7章）について論説され、最後にアンケート調査に基づき、在日ブラジル人が生活する空間の関係性が考察される（第8章）。なおコラムでは、学校教育とアイデンティティ形成、カトリック教会などの宗教が論じられる。

本書が指摘するように、2008年の経済危機により在日ブラジル人の状況や意識は日本定住可否かをめぐり大きく変化し、それは第2次大戦による戦前日本移民のブラジル永住決意と類似する面もある。しかし、現在の日系ブラジル人の暮らしはトランスナショナルに展開されており、その特殊・新奇性や葛藤を本書から深く学ぶことができる。（近田亮平）

加藤薫 著

『骸骨の聖母サンタ・ムエルテ
—現代メキシコのスピリチュアル・アート—』



新評論 2012年 156ページ

本書は、「骸骨姿の聖母」＝「サンタ・ムエルテ」を信仰し、癒しや救いを求めるメキシコの人々の精神生活とそこから生まれた多様な図像表現を日本に紹介することを目的としている。

「サンタ・ムエルテ」とは一体誰なのか、なぜ骸骨姿なのか？ 悪魔崇拝なのか？ マフィアのカルトなのか？ それともメキシコの民衆の生活に根付いた秘めたる信仰なのか？ 謎めいた「骸骨姿の聖母像」は、私達の脳裏に様々な疑問を浮かび上がらせる。筆者自身もこういった素朴な疑問を抱えながら、メキシコ各地でサンタ・ムエルテ信仰に関する取材を重ね、その実像に迫っていった。

本書は次の6章で構成されている。サンタ・ムエルテのルーツと現在（第1章）、サンタ・ムエルテの図像学（第2章）、素材に見る「自然の4つの基本要素」（第3章）、祭壇の構成（第4章）、儀式と祈祷の文言（オラシオン）（第5章）、生と死のコンタクトゾーン（終章）。

終章で筆者は以下のように結ぶ。「サンタ・ムエルテの図像には、信者たちの生への激しい欲望とエネルギーが、時にひそやかに、時に剥き出しに結晶している。かれらの表現を駆動しているものは明らかに「生」であり、人々は「骸骨の聖母像」を心から愛し、「生きるために」その力にすがる。」そういった人々の思いが、サンタ・ムエルテの図像表現に無数のパリエーションを生み、サンタ・ムエルテがメキシコ社会の中に根付いてきた背景にある。

随所に筆者が撮影した写真と取材の逸話が盛り込まれた本書は、メキシコのポピュラー・アートを楽しむ本としてもお勧めできる一冊となっている。

（村井友子）

丸山浩明 編著

『パンタナール
—南米大湿原の豊饒と脆弱—』



海青社 2011年 295ページ
（＋カラー写真等16ページ）

パンタナールは南米大陸のほぼ中央に位置し、面積が日本の本州に匹敵する大湿原である。2000年に世界自然遺産に登録され、日本のメディアでも取り上げられることがあり、ラ米地域に関心が強くなるとも、一度は聞いたことのある地名であろう。しかし、その詳細や現状については、少なくとも日本ではあまり知られていない。本書は、主に地理学を専門とする研究者たちが、パンタナールの環境動態や住民の生活・文化に関し10年にわたりフィールド調査を行い、その成果を取りまとめた「わが国では最初のパンタナールに関する学術研究書といえる」（p.2）。

本書は三部に大別される全9章から構成されている。パンタナールの自然環境条件に関する第Ⅰ部では、その形成史や地形・気候・水循環の特性（第1章）、多様な動植物の生息空間と豊かな生物多様性の関係（第2章）、地表水と地下水の複雑な交流関係（第3章）が詳説される。開発や経済活動に関する第Ⅱ部では、先住民と植民・開発の歴史（第4章）、主要産業である牧畜業とその文化的特徴（第5章）、近年急速に広まったエコツーリズムとその課題（第6章）、スポーツ・フィッシングの進展と漁村の変貌（第7章）が詳述される。事例研究をもとに農場経営と環境問題を扱った第Ⅲ部では、パンタナールでの伝統的な牧畜経営の実態や問題点（第8章）、法規制による環境・社会問題と伝統的な生態学的知識の再評価の必要性（第9章）が明らかにされる。

今年6月、国連の環境開発会議が20年ぶりにリオデジャネイロで開催されることもあり、特にブラジルでは環境問題への関心が特に高まっている。本書は自然・人文地理学が中心ではあるが、パンタナールを事例にブラジルが抱える環境や開発の問題を知り得る貴重な書だといえる。（近田亮平）

寺澤辰麿 著

『バイオレンシアの政治社会史
—若き国コロンビアの“悪魔払い”—』

アジア経済研究所 2011年 299ページ

本書を手にとると、副題にある“悪魔払い”という単語に強く引きつけられるであろう。もちろん本書は、主題にあるようにコロンビアのバイオレンスに関する政治社会史を扱った著作である。本書の問題意識は、従来からあるコロンビアという国、あるいは国民が、バイオレンス（スペイン語でバイオレンシア）にとりつかれた国や国民であるという先入観を打破し、コロンビアの実情を紹介するというものである。

本書はまず、コロンビアにおけるバイオレンスを歴史的にたどっている。まず、保守党と自由党という二大政党の対立によりもたらされた政治的バイオレンスを、両政党の起源とされる独立期の指導者ボリーバルとサンタンドールの思想の違いから説き起こしている。その後、両党による二大政党制の確立とバイオレンスの要因を個別に検討している。1949年から1958年までは、両政党の対立が激化し、ラ・バイオレンシアと呼ばれた最大規模のバイオレンスが発生している。しかし筆者は、ラ・バイオレンシアの背景には、政治的対立に加えて、農地をめぐる争い等の経済的背景があったことを指摘している。

こうした二大政党制を背景にした政治的バイオレンスは、保守党と自由党が交互に大統領を出す国民戦線協定（1958～1974年）により収束する。それに替わるかのように、1960年代頃からは極左ゲリラの活動が活発化し、麻薬密売組織が出現し、再びバイオレンスを引き起こしていった。筆者が本書で最も主張したかった点は、コロンビアにおけるバイオレンスの高さは、貧困や国民性によるものではなく、ゲリラや麻薬密売組織の影響が大きいという点であり、それを最後に既存の研究を引用しながら明らかにしている。

(宇佐見耕一)

清水達也 編

『変容する途上国のトウモロコシ需給』



アジア経済研究所 2011年 272ページ

トウモロコシはアメリカ大陸に関わりの深い農産物である。原産地の1つとされているメキシコでは、トウモロコシを原料としたトルティージャが主食である。中米や南米の一部でもトウモロコシから作ったパンが食べられている。また、米国の中西部やアルゼンチンのパンパ、ブラジル南東部などの穀倉地帯では大量のトウモロコシが生産され、アジア諸国をはじめ世界中に輸出されている。

同じトウモロコシでも種類によって需給の状況が異なる。例えばメキシコでは、主食として用いられる白トウモロコシは生産が消費を上回っている反面、家畜飼料として用いられる黄トウモロコシは消費が生産を大きく上回っており、米国からの輸入に依存している。

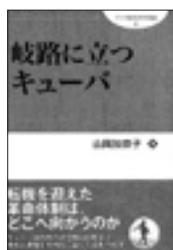
輸出国でも、近年は需給の状況に大きな変化が見られる。米国ではトウモロコシを原料としたバイオエタノールの生産拡大に伴い、輸出に向けられる割合が減少している。アルゼンチンでも養鶏産業の拡大や農地を巡って競合する大豆の生産拡大に伴い、トウモロコシの輸出が停滞している。一方ブラジルでは、拡大する養鶏産業を上回る勢いでトウモロコシ生産が増えており、輸出量も増加している。

穀物や食料の国際市場における価格高騰の要因やその影響については、既に数多くの研究成果が公表されている。それに対して本書は、トウモロコシに絞って各国の需給変化を掘り下げて分析した。アメリカ大陸の4カ国（米国、メキシコ、ブラジル、アルゼンチン）のほか、中国、タイ、東南部アフリカのマラウイを取り上げている。分析の結果、飼料用トウモロコシでは国際市場への統合が進んでいると同時に、種類・用途の違い、物流インフラの制約、政府の介入などにより、現在でも国内外の市場を分離する力が働いていることが明らかになった。農産物の国際流通やラテンアメリカ農業に興味のある人に読んでほしい。

(清水達也)

山岡加奈子 編著

『岐路に立つキューバ』



アジア経済研究所叢書8
岩波書店 2012年 267ページ

本書は、政治的・経済的・社会的に一元性を指向したキューバ革命体制が、冷戦後多様性を認めつつある最新の動きを扱っている。

序章（山岡）では、キューバの政治、経済、社会の概論を、冷戦終結前の時期を含めて論じた。政治を扱った1章（山岡、小池康弘）では、リンズのポスト全体主義の理論をキューバに援用して現在の状況を分析し、現体制がポスト全体主義の初期にあるとする。米国との関係を扱った2章（山岡）では、社会構築論を援用し、両国の対立がキューバの政治体制の一元性を認めるか否かによって生じていると主張した。ALBAとの関係を分析した3章（田中高）は、国内的にはALBAの枠組みがキューバ経済を支え、地域的にはALBA諸国との協力を通じてソフトパワーを発揮し、国際的には反帝国主義、反グローバリズムの主張をALBAの枠組みを通じて行っていると分析した。

経済分析を行う4章（狐崎知己）では、マディソンの長期経済統計、ビダルおよびドイメアディオスのモデルを援用して、マクロ経済分析を行い、外貨制約の大きいキューバ経済が今後発展するための条件を提示している。社会政策の5章（宇佐見耕一）は、福祉国家論の観点から、とくにクックの共産主義福祉国家の議論を援用し、キューバが同類型のもとに社会主義福祉国家をどのように構築したかを描き出した。6章（工藤多香子）は、革命直後に解決済みとされていた人種問題が、冷戦後有色系市民から異議申し立てが起り、政治的に存在が公認されたものの、人種問題の位置づけについて見方が統一されておらず、解決は一枚岩ではない点を指摘している。

キューバの評価は多様であるが、冷戦後にキューバ研究を開始した世代による初の総合的な研究書となる。（山岡加奈子）

Levitsky, Steven and Kenneth M. Roberts eds.

The Resurgence of the Latin American Left



Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 2011, +xiii, 480p.

本書は、2006年末から2008年にかけて断続的に催されたワークショップや会議での議論を元に編まれた論文集である。実は、このワークショップや会合で発表されたペーパーのいくつかは以前よりネット上で公開されていた。特に序章、1章、2章（修正前）、4章の元ペーパーは、最近の「左傾化」を扱った研究でもたびたび引用されていたこともあり、多くのラテンアメリカ政治ウォッチャーにとっては待望の出版ということになる。約500ページにわたる本書は、著名なラテンアメリカ政治学者や各国のエキスパートによる「理論・比較研究」と「事例研究」の2部構成から成る。前半部では、地域横断的な世論調査分析、左派政権下の経済政策に関する計量分析、穏健・急進左派政権の比較、輸出ブームと「ポピュリズムの誘惑」、穏健左派政権下の分配政策、左派政党と市民とのリンケージ、左派系自治体における参加民主主義、左派政権下のシチズンシップの実態など、多岐にわたる興味深いテーマが扱われている。また、後半部の事例研究では、ベネズエラ、ボリビア、エクアドル、アルゼンチン、ブラジル、チリ、ウルグアイの各左派政権（およびウマラ政権以前のペルー）の成立プロセスとその後の政策運営などについて詳細な説明がなされている。特に編者の2人による序章と終章は、「左傾化」の名の下でこれまで論じられてきたいくつかの重要なテーマ（左傾化の理由、類型論、政策の多様性）を、本書所収論文の知見はもちろん、これまでのさまざまな議論もバランスよくふまえた上で、いくつかのストーリーにまとめ上げている。この意味でまさに本書は、近年の「左傾化」をめぐる議論の集大成であり、そこで扱われている国々の政治の現状を知るだけでなく、今後解明されるべきさまざまなリサーチクエストも提供してくれているといえよう。（上谷直克）